
自由奔放人生

樺香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自由奔放人生

【Nコード】

N1868D

【作者名】

樺香

【あらすじ】

自覚していなかった自由奔放な性格から、樺香は人とはちよつと違った生き方を選択していきます。樺香と家族、出会った人々のお話。

自由に生きる樺香の波乱万丈人生

家族に「おまえの人生波乱万丈やな。小説でも書いたら売れるんじゃないか」といわれ、調子に乗って、書いてみる事にした。

でも手間がかかることは続かないし、手軽にかけて、人様に反応をもらえそうな携帯小説に挑戦することにした。

どこまで何をかけて、何を伝えられるのかまだ分からないまま、つれづれなるままにつづっていかうと思います。

自分だけじゃなく、一族が結構それぞれ波乱万丈であると思うのですが、確かに同じ姉妹の仲では、自分は浮き立って好き勝手ワガママ自由に生きてきてる。

最近やっと自覚してきたのだけれど、「弾丸娘」。

18才で自動車免許をとり、車に乗れるようになってからは「コイツはどこに行くかわからんから」といわれた。

約2年後にそれは実際に起こってしまうのだけど…。

今思うと昔から多数決という普通の子供とはちよつと違う変な子であり、今も変な人だと思う。

これからも変な人であり続けるのだと思う。

一時期コンプレックスだったものの、だってこれが自分だもの、と。でも、義務の上に自由があるのです。

自覚してから、言われて気付いた「自分が自由奔放」ですが、友人に「自分の思った道に、自分で進んでいくのが、あんたらしい」といわれ、良い意味か悪い意味で言ったのかは気にしないことにして、ちよっと誇らしく思っています。

後から釘が刺されるかもしれないけれど、その時まで誇るとききます。

自分の人生自分が主役なんだもの。
他の人の人生を無駄にさせることは、自分が主役とかいいつつ絶対してはいけない事です。

次から、まともなお話にうつっていきます。
愛読していただけたら嬉しいです。

今後ともよろしく願います^^ノ

幼い頃の記憶

幼い頃の記憶と言えば、結構不思議なものが多く：

単純に挙げていってみれば、

オムツがまだ取れていない頃、姉達と遊びに出たものの、鬼ごっこか何かで自分が鬼にされて、皆逃げるのだけれど、オムツが邪魔で走れない。

自分はワンワン泣いてて、きゃっきゃきゃきゃ言いながら逃げる姉達の姿がみえてる。

なんか白いもやに包まれてるような視野で、それに包み込まれるように記憶もそこで途絶える。

後、洗面所で手を洗う自分を、他の人が見ているように、洗面所の置くから見ているような記憶とか。

女の子といったら、人形遊びが好きで：とか可愛い遊びを聞いたりするけれど、自分はそんな事なくて、人形に対して結構乱暴な事をしていたり、子供らしい残忍さを今思えば思い出す。

子供って、結構残酷な事が平気だったりしますよね。

成人した今となって、昔を思い出して、その時とは違う自分が小さい自分をみて書いているわけだけれど、断片的に思い出す記憶は残っているものの、殆ど消え去っていつている。

ちょっと残念なことなのかもしれない。

後、小さい時から、結構虐められていた気がする。

3歳か4歳くらいの時、同じマンションに住んでいた一つ年上の姉

の友達の子に、遊びに誘われ、その子のおうちで遊んで居ただけで、遊びはもう終わりって言うところで、遊んだものを片付けないといけないんだけど、自分はどうしてもトイレに行きたくて。

でも、相手の子が片付けるまで許してくれない。

もじもじしながら、必死で片付けて（相手の子は全く手伝ってもくれないのだけど）さあ！トイレにはいった！トイレできる！…と、トイレには入ったものの、便座に座る事が出来ず、お漏らししちゃったのでした…。

トイレトペーパーで、ある程度自分で床を拭いたんですけど自分には到底無理で、家に帰って、母に助けを求めました。

洋服を着替えさせられ、毛糸のパンツもはかされ（笑）、母と共に、その子のおうちにまた戻って、お掃除とごめんなさいをしいったのでした。

その後、その子には、会うと文句を言われたのを小さいながらに覚えています。

あと、マンションに猫が住んでいて、プランターによく入っていたとか、家族で可愛がっていたけれど、皆の留守中に勝手に入ってきて台所に押し入ってちよっと怖かったとか。

母が、縛って茹で済みのカニをテーブルの上においていたのですけれど、小さい自分には動いたように見え、「動いた！」なんていったら、「じゃあ、逃げないように見張ってて」って言われたもので、ずっと見張ってたのですけれど、今思い出すと、絶対にあのカニは逃げようがありません。

あ、母には鷹の爪の種を「食べてみる？ ぴりぴりするけど」なんていわれて食べちゃって、「ひー！」ってなって、洗面所に逃げ込んで一生懸命うがいしてたのを笑われた記憶があります。

今思うとめっちゃひどい話ですよねえ。

思い出すとちょっとセンチメンタルな気分になるけど、これは神奈川県に住んでいた時のお話。

その後、雨の日、樺香家族は東京に引っ越すことになるのです。

関係なく

どうも順をおって書いていくと言うのが苦手だ。

そうやって賢く書いていくと、本当のそこにあつたことを書き落としてしまうような。

感情を投影できない。

最近感じるのは、感性を生かし、物を作る世界に踏み込み、普段から感性を感じる（表現おかしい？）事を重視していると、今感じている事を伝えることが一番相手に伝わる、と感じる。

勿論、コントロールして伝えることも重要だけれど、感じている事をぶつける事は強いと感じる。

というわけで：

熱弁したものの、猫の話。

今日の朝、とても寒く、家の近所には元家猫出身と思しき野良猫が住み着いているのですが、最近あるお宅の庭に住み着いているようです。

朝暫くした時間帯には、庭の見えるところにいるのですが、サラリーマン、学生達が行きかう時間帯にはとんと見かけない。

どこにいついているのかしらと思ったら、いつものお宅のプランターに入り込んでいました。

ふかふかして、目を細めて。

神奈川県に住んでいた頃、前回の章にも書いたように、マンションにはサスケという猫が住んでおりました。

皆が留守で私だけ寝かされていたところに、開いている窓から、家の中に侵入し、台所をあさった子です。

よく、マンションのベランダのプラントーにはまり込んでおりました。

猫といえど。

父方の両親が奈良にすんでおり、私の祖父母ですね、祖父母の住まいの周辺には、野良猫が沢山おり、公園の砂場は猫たちのおトイレになっておりました。

祖父母宅のあった奈良でも沢山の思い出があります。

夏に行く事が多く蟬が沢山居た事。

祖父母と母が仲が悪かった事。

祖父母の機嫌をとるのに気を遣っていたこと。

ひのなの漬物。

朝早くに祖父が仕事に出かけるのに、先に食事をしていたこと。

狭いベランダ。

狭い風呂。

オレンジ色の、ペダルを踏むと蓋がパタパタ開くゴミ箱。

玄関の石鹸の飾り（リボンとマチ針で飾られている）

フランス人形。

古い靴下駄。

時代劇風のかぶりもの。

トートムポール。

お砂糖の飾り物。

小銭沢山詰まったビン。

雉の剥製。

背もたれの角度を変えられる座椅子。

針金の入った、最後まで気に入った事の無いクッション。

今でも、細部まで思い出せる。

幼い頃はいろんなことがデフォルメされていて、のちのち明らかにされることは、なんとなく兆しを感じつつ、真実などは知らなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1868d/>

自由奔放人生

2011年1月4日17時27分発行